《公開講演会記録》

世界遺産への招待状

ＮＨＫエンタープライズ世界遺産プロジェクト事務局長　須磨章

世界遺産運動の始まり

現在、世界遺産っていくつあるとお思いですか？

１９７２年に世界遺産条約が採択されて今年で40周年、１５０カ国以上にわたり９６２件が登録されています。

どのようにして登録されてきたのか、まずその足跡を辿ってみましょう。そもそもこの運動が盛り上がりをみせたきっかけは、エジプトの「アブ・シンベル神殿の救済活動」です。紀元前１２５０年頃にラムセスⅡ世が建立した巨大な遺跡が、アスワン・ハイ・ダム建設のためナイル川に沈むという問題がもちあがり、フランスやアメリカといった大国も参加した国際的な運動によって、丘の上に移築されたということが、モデルとなっています。

当時のエジプトは近代国家に生まれ変わるためにどうしても灌漑用水と電力を生み出す巨大なダムが必要でした。しかし一方では古代エジプト文明のひとつの象徴といえる神殿は救いたい。開発と遺跡の保存の狭間でエジプト政府は悩み、国際社会に訴えました。「ダムは造りたいが、遺跡も残したい」この難問がユネスコにもちこまれたのです。

国連の教育文化機関としてのユネスコにとって、巨大文化遺産の保存という問題に関わったのは初めてのことでした。「遺跡はソクラテスの思想やベートーヴェンの交響曲と同じように人類共通の財産だ」と各国に呼びかけ、募金をつのったり、ツタンカーメン展覧会を展開し、その利益の一部を資金にしました。皆さんの中にも、そういえばツタンカーメンの展覧会を見たという方もいるでしょう。あれはこの保存運動の一環だったのです。

フランスの少女が豚の形をした貯金箱ごと寄付したのをきっかけに、一般市民からの募金も集まりはじめました。しかし、入口にラムセスⅡ世像が４体も並び、高さ33㍍、幅38㍍、奥行き63㍍の巨大な岩石をくりぬいて造られた神殿を丘の上に運び上げるだけのクレーンはありません。なんと一人ひとりの職人が自らの手でノコギリを引き、ラムセス像の顔などを切断して、１０４２個のブロックに分けて一つひとつ運んだのです。チェンソーだと切れ目がギザギザになってしまい、手仕事に頼らざるを得なかったわけです。

その様子を私たちは「検索deゴー！とっ

ておき世界遺産」という特集番組で放送しました。記録映像の、ダムの建設で水位があがるなか、昼夜を徹してノコギリを引く各国の職人たちの姿はとても感動的なものでした。

何年間もかけて行われた救済工事は1968年に完了し、神殿は無事に63㍍上の丘の上に移築されました。

アブ・シンベル神殿の救済活動が素晴らしいのは、スエズ運河の利権をめぐってエジプトと敵対していたフランスなども参加して活動したこと。政治より文化が勝ったということです。そして普通は、「開発か保存か」の二者択一をせまられることが多いなかで、ダムも造り神殿も残すという「開発と保存」の双方を実現したことです。

ユネスコはこの経験をもとに、各国の協力によって人類の貴重な遺産を守っていこうと、「世界遺産条約」の締結を呼びかけたのでした。

アブ・シンベル神殿（エジプト）

登録の系譜

世界遺産運動は、アブ・シンベル神殿という、まさに堅牢な岩石の遺跡の救済からはじまったわけですが、1975年に登録がはじまった初期の世界遺産は、まさに「石」の文明だったといえます。考えてみれば宮殿にしても城郭にしても大聖堂にしても、それらはまさに不動な石で築かれています。

判りやすい例をひとつ挙げますと、スペインの「セゴビア旧市街の水道橋」があります。ローマ時代のまるで鉄橋のような水路です。18キロも離れたアセベダ川から町まで水を引いたこの水道橋は、無数の石を全く接着剤をつかわずに組み合わせ、一分の狂いもありません。水源から街にむかって一定の角度を保ち、常に都市に水を供給してきました。現代まで一度も本格的な修復をすることなく、今でも使おうと思えば使うことができるといいますから、やはり石は命が長いといえます。

「人類にとって顕著で普遍的な価値を有するもの（Outstanding Universal

アスワン・ハイ・ダム（エジプト）

Value)」――これが世界遺産の登録基準の根幹をなす文言です。まさに普遍的な価値あるものは「石の文明」だというところから世界遺産の登録は始まったといえるでしょう。

考えてみれば、ベルサイユ宮殿もシェーンブルン宮殿も石、モン・サン・ミッシェルのような大聖堂も石、中世の城郭もすべて石造りです。初期に登録された有名な世界遺産は「石」、すなわち「ヨーロッパ文明」を象徴するものだといえます。

そうなると日本は不利です。世界遺産条約を批准してから最初に登録を目指したのは「木の文明」の象徴ともいえる「法隆寺」でした。しかも申請理由の核、すなわち売り文句は「世界最古の木造建築」というものでした。この価値をユネスコに認めてもらうまでには大変な苦労があったといいます。

法隆寺（日本）

ユネスコが委託している文化遺産の諮問機関ＩＣＯＭＯＳ（国際記念物遺跡会議）の委員たちは、法隆寺を視察して１４００年も前の素晴らしい建築物だということは認めても、「真正（Authenticity）」なものとは認めがたいというのです。「材木は腐り交換されている。火災にあい再建された部分もある。建てられてから不動のままでここに存在していたわけではない」という主張です。

それに対して日本側は、「最初の設計図が残っており、それと寸分違わずに修復している。材木は最初のものと同じ産地、同じ材木が使われように努めている」と訴えて、ようやく認められ、日本で最初の世界遺産として１９９３年に登録されました。

これを契機に世界各地の木造文化が認められようになりました。中でも「マラムレシュ地方の木造教会群（ルーマニア）」はその美しさに感動します。モミの木の一種で、村人自らの手で釘を一切使わずに建てられた素朴なキリスト教会が８つの村に点在しており、日曜日には外には

マラムレシュ木造教会（ルーマニア）

み出すくらい多くの村人がミサに集っています。最近は近所に石造りの教会ができましたが、特に洗礼や結婚式など大切な儀式は、必ず木の教会で行うのが慣わしになっているといいます。映像を見ていても、木は何か生命の息吹を感じさせ、村人たちが木造教会を愛する気持ちが伝わってきます。さらにこの地方ではお墓までがモミの木を使った木造なのです。その木に生前のその人の仕事や暮らしぶりが偲ばれるカラフルな絵が描かれていて、なんとも明るく温かみのある墓地となっています。

クヴェトリンブルクの旧市街（ドイツ）

この他にもポーランドには大理石と見まがうほどの彫刻がほどこされた木造の教会（ヤヴォルとシフィドニツァの平和聖堂）もあります。30年戦争でカトリックの勢力下におかれ、プロテスタントの教会は石造りが許されなかったというのが木造の理由だといいますが、木造建築としてはヨーロッパ最大級の堂々たるものです。またドイツにも市民の力を規制しようと石造りを禁じたため木造の町並みが保存されたという町（クヴェトリンブルクの旧市街）があります。木は石に比べて格下と見られていたわけですが、「木の文明」は必ずしもアジアだけのものとは限らないのです。

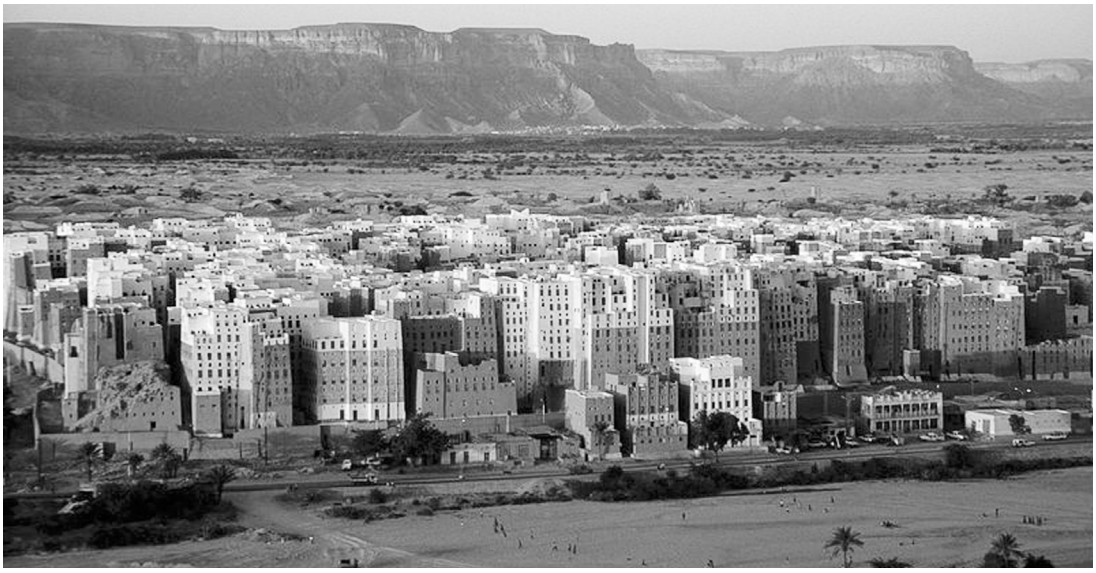
さて、木、石、とくれば次は何の文明だと思われますか……？

そう、泥、「土」です。

その代表的な世界遺産が、アフリカはマリ共和国の「ジェンネ旧市街」です。

この町の中心には泥を乾燥させた「日干しレンガ」で造られた高さ20㍍のイスラム教の大きなモスクがあります。外部に突き出たヤシ材の骨組みが装飾的な効果をもたらし、年に1回のお祭りの時は住民が競ってそのヤシ材を足場にしてモスクによじ登り、粘土状の泥を塗りたくります。これがいわば修復になっているわけです。お祭りがモス

ジェンネ旧市街のモスク（マリ）



シバーム高層建築群（イエメン）

クの修復にたまたまなったのか、モスクの修復の為にお祭りが生まれたのはわかりませんが、一挙両得です。先ほど書いた「真正」という観点からいうと、ここは毎年新しい土に生まれ変わっているわけで、かなり登録基準の考え方が変わってきていることがわかります。

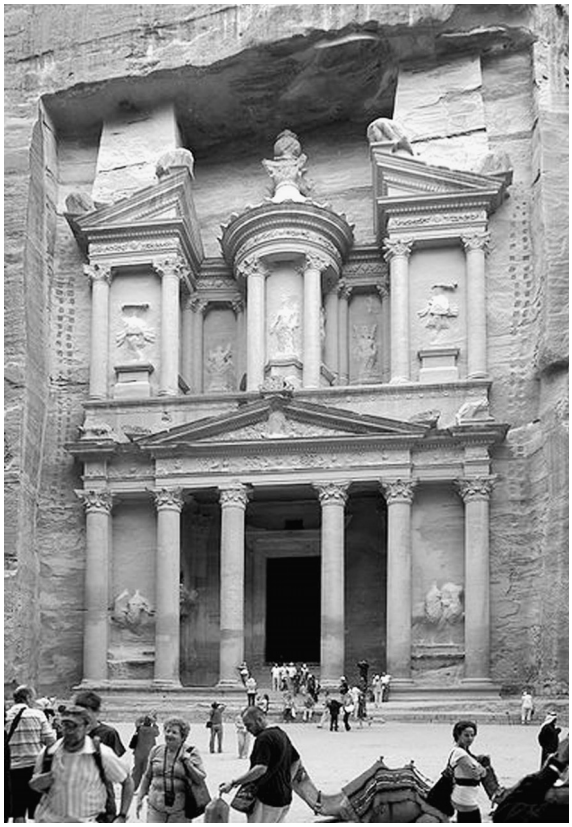
この町では、衣類の装飾にも泥が使われています。家の前の路上では、女性たちが木のへらを使い衣類に泥を塗り模様をつけている風景がみられるのです。

この他に「泥、土の文明」で有名なのは「砂漠のマンハッタン」と呼ばれるイエメンのシバームがあります。ここには5階から8階建ての高層住宅が並び、宮殿もあります。1階に使う泥には草などが混ぜられ強度をあげ、壁を厚くしています。2階からは段々と壁を薄くし、しかも床面積も狭くしてうまくバランスをとっています。

この他にも映画「インディ・ジョーンズ」に登場するヨルダンの「ペトラ」は岩壁の砂岩を刻んで壮麗な建築物をつくった都で、岩と土の世界遺産です。

中東やアフリカにはまだまだこの「土の文明」地域が広がり、世界の3分の1は土の世界といっても過言ではないでしょう。

それにしても人類は、自分たちが暮ら



ペトラの聖堂（ヨルダン）

先住民集落の墓地（アメリカ）

す地域でふんだんに採れる素材をうまく利用してそれぞれの文明を築いてきたものだと、世界遺産登録の変遷をみても考えさせられます。世界遺産の第１期が「石の文明」だとすると、第２期は「木、そして土の文明」だといえるのです。

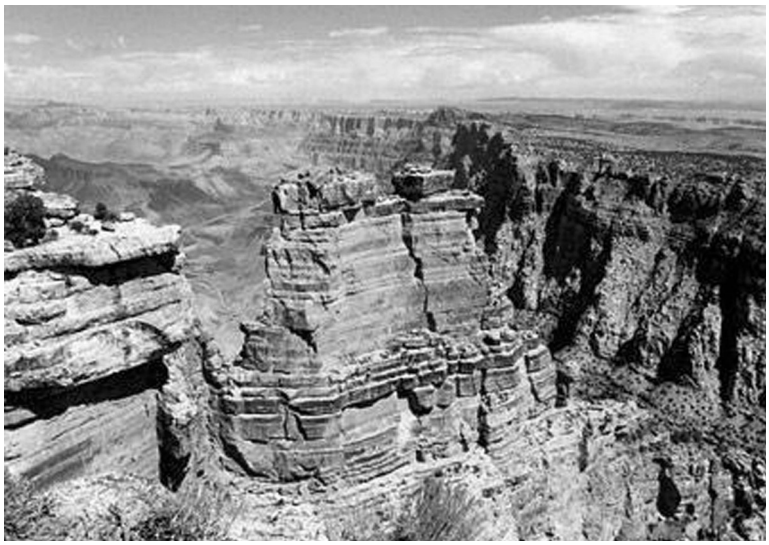
アメリカと世界遺産

世界遺産とは、最初に書いたように「アブ・シンベル神殿」の救済活動をきっかけに、ユネスコが音頭をとって制定された国際条約です。最初の発想は人類が築いてきたいわゆる「文化遺産」でしたが、地球という星が生み出した「自然遺産」も加えられました。

この自然遺産の誕生には、アメリカが大いに関わっています。ヨーロッパに比べて歴史の浅いアメリカには、文化的な遺産はあまり見当たりません。しかしスケールの大きな自然はふんだんにあるということで「自然遺産」を条約に加えるように強く主張したというわけです。

現在アメリカには20の世界遺産がありますが、その中で文化遺産は、自由の女神像や独立記念館そして先住民の遺跡など８カ所だけであとの12カ所はすべて自然遺産です。イエローストーン国立公園やグランド・キャニオン国立公園などが日本人にもよく知られています。

アメリカのような大国を無視して国際条約はうまく運ぶわけもなく、国際社会



グランド・キャニオン（アメリカ）

の力関係が自然遺産を誕生させたということがいえるでしょう。

しかし自然遺産が加わったことで、世界遺産も大いに色合いが艶やかというかスケールが増したはずです。しかも自然環境問題が人類の大きな課題になった現在、自然遺産の保全も大きなテーマになっていることを考えれば、アメリカの国力が生んだ自然遺産は世界遺産に素晴らしい要素を加えたといえるでしょう。

ＮＨＫの取り組み

私たちが世界遺産に取り組みはじめたのは、２００３年の末ですからもうすぐ９年になります。

現在までに、９６２件の世界遺産のうち７００件近くの遺産を映像におさめています。かつては「探検ロマン世界遺産」や「世界遺産への招待状」という番組を放送し、現在では「検索deゴー！とっておき世界遺産」というタイトルで73分の特集番組を放送しています。総合テレビ土曜日の夜７時30分からのゴールデンアワーです。

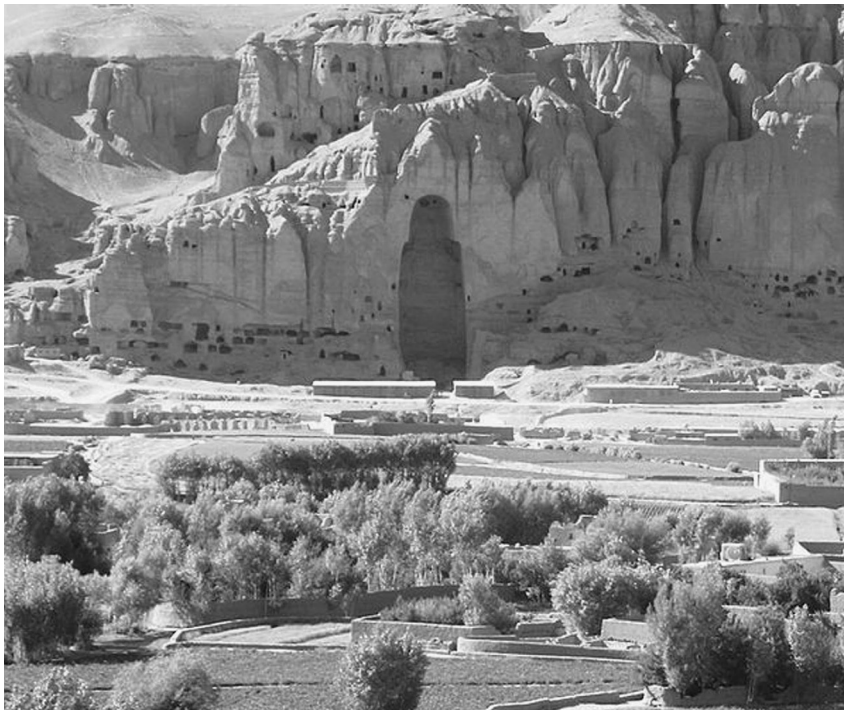
その番組と兄弟関係にあるのが「世界遺産１００」という５分の番組です。これは総合テレビ月曜日夜11時20分から、土曜日午前11時25分からをはじめとして数多く放送されています。この番組の映像はユネスコに送られ、英語をはじめとして５カ国語に訳されユネスコのホームページを通して世界各国に配信されています。また学校で使うことを目的とした「世界遺産教育ＤＶＤ」の中でもＮＨＫの映像が使われ、近年中に世界８０００校の子どもたちに見られるようになる予定です。

ＮＨＫとユネスコとは「パートナーシップ契約」を結び、世界遺産の映像を単に放送だけではなく、教育や研究分野にも役立てていこうと考えているのです。

人類にとってかけがえのない文化財である世界遺産も不変ではありません。

２００１年にアフガニスタン、バーミヤンの大仏がタリバーン（イスラム原理主義組織）によって爆破されたことをご記憶の方も多いと思います。戦乱、自然災害、都市化、環境異変などによって、世界遺産とて被害を受けることがあるのです。

そんな時のためにも、高品質のデジタルハイビジョン映像で世界遺産を記録し



バーミヤンの破壊された遺跡（アフガニスタン）

ておく意味があると私たちは考えています。事実、イランのバム遺跡が地震で崩壊した際には、ＮＨＫの映像を提供し修復に役立てられています。

私たちは、国の垣根を越えて「人類の宝を守ろう」という理念に支えられた世界遺産の映像を、さらに蓄積していきたいと考えています。

普遍性から多様性へ……

さきほど世界遺産登録の第１期が「石の文明」、第２期が「木、そして土の文明」と書きましたが、それでは第３期はどんな時代なのでしょうか？

まず注目しなくてはならないのは発展途上国の存在です。現在、世界遺産条約を批准している国は１８９カ国に達していますが、その中でまだひとつも自国に世界遺産がない国が32カ国もあるのです。「各国の協力で危機に瀕している世界遺産を救おう」というのが基本理念ですから、小国ではあっても一定の供託金を出しているはずです。

世界遺産の登録は各国政府がユネスコに対して提案（推薦）し、それを文化遺産であればＩＣＯＭＯＳ（国際記念物遺跡会議）、自然遺産であればＩＵＣＮ（国際自然保護連合）という諮問機関が調査し、ユネスコに答申され、最終的には年に１回の「世界遺産委員会」で指定される仕組みになっています。このプロセスの中でまだ世界遺産のない小国が優先されるのが人情というものではないでしょうか。

事実、２０１２年の登録では、ブルキナファソ、カーボベルデ、キルギスタンの３カ国から初めての世界遺産が生まれています。「人類にとって顕著で普遍的な価値を有するもの」というメーンの登録基準が、実際には「多様な文化と歴史」に動いてきているのは明らかです。

ただこの傾向は私から見るとかえって好ましいことのように映ります。

スタッフが各地で取材してきた世界遺産は、たしかに小粒にはなっていますが、人々の心がこもった感動的なものがあります。たとえばドイツの農村で「涙を流したキリスト像」（ヴィースの巡礼聖堂）というのがあります。農家の納屋に放置されていた血だらけのむごい姿のキリスト像を、隣村の農婦がかわいそうだと自宅に持ち帰って安置したところ、ある晩なんと涙を流したというのです。その農婦の証言は教区でも真実だと認定され、近隣からの巡礼者があとを絶たなくなりました。

そしていつしか、そのキリスト像のために多勢が参拝できる立派な教会が建てられたのです。外観は質素ですが、内部はロココ様式の荘厳で華麗な装飾で彩られています。世界史に登場するような豪華で権力を誇示したものではなく、庶民の信仰心が生んだ世界遺産で、心をうたれるものがあります。

大国のドイツからもそのような庶民の歴史が世界遺産として推薦されているわけで、あきらかに傾向は変わってきています。

豪華絢爛で眼を見張る人類の宝から、さまざまな民族の文化や心を映す世界遺産まで、私は毎回楽しみに映像編集室に足を運んでいるのです。

（７月６日・講演会）

講師略歴（すま　あきら）
１９４８年　東京都生まれ
１９７１年　慶応義塾大学法学部卒業
ＮＨＫ入局　ドキュメンタリー番組の企画、制作に従事
現在　世界遺産プロジェクト事務局長として世界遺産関連番組を統括